令和2年度　第1回立科町総合教育会議事録

日　　時　　　令和3年2月16日（火曜日）午後3時30分～4時20分

場　　所　　　立科町役場　中会議室

参集委員　　　立科町長　　　　両角　正芳

　　　　　　　立科町教育長　　塩澤　勝巳

　　　　　　　教育長職務代理　中澤　士郎

　　　　　　　教育委員　　　　堀　美智子

　　　　　　　教育委員　　　　池田　広

　　　　　　　教育委員　　　　久保井　智恵

事務局　　　　齊藤総務課長　市川教育次長・浦野こども教育係長

　　　　　　　芝間社会人権教育政策係長

傍聴者　　　　なし

協議事項　　（１）今後の学校運営について

　　　　　　（２）その他

市川次長：委員の皆様方には引き続きの会議でご苦労でございますが、よろしくお願いいたします。立科町総合教育会議の目的は町長と教育委員会が円滑に意思疎通を図り、町の教育の課題や目指す姿勢等を共有しながら連携して効果的に教育行政を推進するためとされています。この目的に沿って本日話し合いをいただく訳ですが、よろしくお願いします。尚、先ほど教育長から申し上げました通り、町長今日、急きょ公務が入ってしまいまして、参加時間に限りがありますが、よろしくお願いします。それでは両角町長からご挨拶をお願いします。

両角町長：皆さん改めましてこんにちは。今司会から話がありましたように、本来であれば私がこの総合教育会議を進めていかなければならない立場ですが、今日はどうしても急に重要な公務が急きょ飛び込んできまして、この会議の中にずっといられない、大変申し訳なく思いますが、代わって教育長にお願いしていますのでご理解をよろしくお願いします。教育委員の皆様方には日頃から立科町の教育全般に渡り本当にご理解ご協力をいただいております。特にそれぞれの皆様方も指針に基づき、そのそれぞれの想いが立科町の子どもたちの教育、また成長に繋がっていくということでしてまた、それぞれの立科町の中でもそういった関係では大きな問題もなく、今日に至ることも重ねて御礼を申し上げる次第です。また、だいぶ静まってきたと言っても新型コロナウイルスの関係についても立科町からは若干の感染者、新患としては出ておりますが、学校現場の部分、子どもたち含め、感染者が出ていないことは、とにもなおさず教育委員の皆様方の日頃から子どもたちを見守っていただきながらそしてそれに対する指導をいただいていることの賜物であるので改めて感謝申し上げます。いずれにしても現在の教育を取り巻く行政は情勢的にも大変厳しい部分もありますしまた、大変混迷している部分もあります。児童数の減少等も現在立科町の人口が減少している中での出生数の減少が大きな起因になりますが、しかし立科に生まれ、また立科に訪れていただいている皆さんが立科に生活する子どもを、その成長を近隣の皆様方には本当に温かく見守っていただいています。これからもどうか見守りながら、子どもたちの成長を願っていただければありがたいと思います。今日も今後の学校運営についてとなっておりますが、これから立科町の生徒数減少の問題は避けて通れない状況もあります。私としては、私の公約の中にも立科の子どもたち、一人でも多く誕生し、人口増を図りたい想いがありますが、やはり現在の流れから来てそう大きな数が増えていくことも期待しづらいのもあります。どうかこれからの学校運営の中に教育委員の皆様方のそれぞれのご意見もこの後出てくると思いますが、それの今後についてお話いただければありがたいと思います。どうかこれからワクチン接種もされていくとなっていますがまだ少なくともこれからの日常生活今までと同様に過ごしていかなければならないのでどうかお体ご自愛いただきながらこれからの立科町の教育行政に一段のご理解ご協力を賜りますよう、重ねてお願い申し上げて整いませんが私からの挨拶に代えさせていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げします。では大変恐縮ですが、本来ずっといなければいけないですが、申し訳ありませんが、教育長に引継ぎをさせていただきますのでよろしくお願いいたします。失礼します。

市川次長：それでは町長不在ですので基本事項の進行は塩澤教育長にお願いします。

塩澤教育長：引き続きの会議大変ご苦労様です。諸般の事情もありまして、町長、公務で出なければいけないこともありまして大変申し訳ございませんが失礼させていただきます。代わりまして私のほうで進行させていただきます。よろしくお願いします。早速3番の協議事項へ進めさせていただきます。（1）学校運営について　大きな題で載せさせていただきましたが、状況説明を主にさせていただければと思います。それでは事務局から資料に添って説明をお願いします。

市川次長：今回の議題は今後の学校運営についてということです。町長申し上げたようにこれから少子化の影響がだいぶ懸念されてくるところです。令和2年度の全児童生徒合計が436人というのが令和3年度は429になります。減少傾向になりますが、学級編成については各学年とも一応2学級編成を保てると。ただ1学級が1名程度の差で単級クラスになる可能性もありますが、一応当初の出発については全ての学年で2学級編成で組むということです。

平成27年度生まれが令和4年度から新小学校1年生に入学し1年生の全数が32名ということで、今現在の長野県の現状35人学級の人数を下回って単級になる可能性が高いです。国は令和3年度から1学年ずつ令和7年までかけて35人規模学級にする予定です。長野県は先行してもう既に中学校まで全学年35人規模学級でやっていますが、もしかすればこれからまた県教委の要望で30人学級の実現とか、そういうことの運動などもしかすれば必要になってくるのかなということです。また、長野県内、複式学級が小学校では長野県内16校、中学校では7校が複式の学級となっています。県下、小学校全学級のうち約4分の1規模が12人以下の学級編成になっているという状況です。立科町に限らずどこの自治体も同じような傾向にありますが、子どもの減少によって、これからの学校運営かなり厳しいものになる状況にあるのではないかと思います。本日このような立科町の状況も試算させていただいた中で教育委員の皆様方には貴重なご意見をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。子どもの数が減ることによって学校の教職員が定数の基準により配置が減るということが出てきます。特に専科の教員も例えば小学校だと家庭科とか音楽とかありますが、学級数によって配置される基準があるので場合によってはそういった配置がされなくなる可能性も高くなってくると。そうすると他の先生方への負担も増えてくるのかなという気がしています。このようなことも懸念されますが、今後の立科町の小中学校の在り方についても貴重なご意見をいただければ。いずれにしても今後本格的に検討を始めていかなければならないとは考えておりますが、今現在で教育委員さん方にはご認識というかお考え等もお聞かせいただければありがたいのでよろしくお願いします。

塩澤教育長：今、次長から学校運営について、子どもたちの数を中心にしてこの状態で行くと学校はこういう軸になっていくだろうというところをお示しさせていただきました。子どもたちの数が減ることによって単に学級数が減るという見立てではなくて、そこに関わっていただく先生の数が減る、場合によっては逆の面が出てきてしまう。現在2クラスになっているところの一番多いところが51人です。51人を2クラスにしているので、25人と26人という学級編成ができています。これを今度国が35人に引き下げると言っても35人以下になってしまった場合については34人なら35人で1学級になってしまう。そうすると今の学級人数よりも増えてしまう、逆に。10人増えてしまうという逆の現象が起こってしまいます。人数が減ったから1学級の生徒数が減るんじゃないか、そうじゃなくて逆に増えてしまうという逆の現象が起きると今の学級編成が後退してしまう実態にもなりかねない。大変厳しい状況であるということを一つご理解いただきたいと思います。この問題については町長先ほど挨拶の中でも申し上げましたが、一気に子どもたちを増やすのはなかなか難しい話だと思いますが、町は今までもそうですが、特に両角町長になりましてから公約にも掲げておりまして、是非人口増を図りたいということで子どもが減っていくのを、少しでもその減り方を少なくしたい、逆にまた少しでも増やしたいということの中で、人口増を図っていきたいということで定住者・移住者促進施策を充実させていくということで、こちらに来る方については住宅の補助しますよ、とかそういうのをしていきたいということで、予算を来年考えておりますし、若者に帰って来ていただかないと子どもが中々増えませんので、来年度から、高校卒業して町外の大学に進学された方がこちらに戻ってきてほしいと考えまして、奨学金を借りて行くような方については帰ってきて、奨学金の返済が始まりますよね。その返済に対して定住してくれるなら返済金の補助をしましょうという施策を来年度3年度から実施していくという予定にしています。その他に子育て支援が一番かなと思いますので、今までもやってきましたが、さらに来年度は組織の一部を変更しまして、子育てに関わる分野を一箇所にまとめて、そこで子育てについてはほぼ手続きや相談ができるという部署を設けてしっかり対応しようということを考えています。それは町ができることだと思っています。もう一つは、国が40人規模学級を35人学級に1年ごとやっていって5年で全部、小学校については35人にするということですが、県は前倒しで35人学級でやってもらっていますので、今度教育委員会としては県に対して、国は35人になるので県はさらに前倒しで30人にして欲しいという要望をしていく必要があるだろうと考えています。これは立科町だけがやるんじゃなくて該当するところには是非積極的に一緒になって県に要望して欲しいと思います。県でも中澤先生がご承知のように教員の配当基準がありまして、通常学級が何学級あったら正規教諭になるか。中学校も小学校もそうですが、それに連動して専科の先生何人という配当基準です。学級数が減れば減るほど先生の配当も少なくなるし、少なくなると先生方は大きな学校でも小さな学校でもやることはみんな同じですので、先生1人の公務負担が増えるということで、そうするとなかなか子どもたちと向き合う時間が少なくなってしまうということも生じてきますので是非そういった弊害のないように優遇したいということも強く要望していかなきゃいけないし、専科の役割については、本来、今県は35人学級でやっていますので小学校35人で見てくれればいいですが、そうではなくて専科については国の基準の40人、40人を1学級として見るという採用になっていますので、実際にうちのほうが12学級あるから12人来るかって言うと、そうじゃなくて、今うちで言うと40人で換算すると10学級です。すると2学級減。それに伴った専科資格がいるということなので大変厳しいなと思います。今年の先生方の異動の中で私、お願いしたい、小学校に特にお願いしたいのは、中学校は6クラスしかないので専科の先生のなかなか配当が厳しい。是非複免の先生をお願いしたい。例えば理科と家庭科とか。なかなか数学英語が一緒というのは先生そんな授業数できないので授業数が少ない家庭科であるとか、音楽と国語とかいうように複免の先生を是非順次回してほしいというような要望もしてありまして、一部そういった要望も通していただけるようになってきましたが、いずれにしても子どもたちの数が減ることによって学級数が減れば、単に規模が小さくなったというだけでなくて、様々なところに影響が出てきてしまうということです。専科の先生が県費で回ってこないとすればそれは町対応しなければならない。専科の先生来ないから小学校で音楽はなし、中学校で美術はなしという訳にいかないので。それはやっぱりその分は町が手当てをしなければいけないということになりますので、様々な面で影響が出てきますので、何とか先行きは厳しいですが、少しでも人口を増やして子どもたちを増やしていければということで、まずはそちらへ準備をしていきながら対応していきたいと思いますが、そんなに思うほどうまくいかないものですから実態として、次長言いましたように、今後数年の間にそういった現状は如実に現れてくることになろうかと思います。長い目でまたそれについては検討しないといけないということになりますが、現実としてこんな状況になるということをご承知おきいただいて、そうは言ってもこの現状の中で、こんなことを学校の中で共有して行ったらどうだろう、こんなことで対応できることもあるんではないかという様々なご意見を委員さんからいただければ、取り組みさせていただきたいのでよろしくお願いします。それでは私のほうで話が長くなって申し訳ありませんでしたが委員さんからご意見等ありましたらお願いします。

中澤委員：複式っていうのは定員、教員定数に対してそのままなんだけど割るっていう意味ですかね？どういう意味で使っているんですか？

塩澤教育長：複式というのは複数の学年が一緒になっている。

中澤委員：そういう意味ね。分かりました。

塩澤教育長：つまり学年は必ずしもそうとは限りませんが、人数に応じて5年6年だけとかあるいは3・4・5が1クラスになるとか、児童の数によってそれぞれ増やすとか…そういうことです。

中澤委員：分かりました。私、誤解していました。先ほど教育長おっしゃられたように小学校の英語の専科取っていただいて、非常に教育長さんのお力のおかげだと思います。本務校が立科小学校で、浅科へ兼務という非常にありがたいことだと思いますが、先ほどの教育兼務校、ある程度やりながら、兼務させながら専科の教員を取ってくという方法が県のほうではあると思いますが、それと同時に立科町の教育委員会とすれば例えば先ほど教育長がお話になられた複免を持っておられる方、複数の免許を持っている方を優先的に来ていただくと。特に規模が小さい小中学校にはこれが有効だろうと思いますし、今なかなかいないんですが、中学校の英語の教員免許を持っていてかつ小学校の教員免許を持っていると。そういう方、数は少ないですが。そうすると小学校の英語についてもある程度対応できるし、もちろん中学校の英語教育指導経験もあると。色々な複免の形があろうかと思いますのでそういったことも教育事務所通じて県に要望していただければありがたいと思います。それからもう一点専科の話がありましたがやっと国のほうも家庭科・音楽科、ここに出てきたように英語に加えて理科と数学についても小学校に専科をという話がやっと出てきて、これはなかなかすぐには進まないと思いますが、そういったこともある程度視野に入れながら、かつ少子化ということで専科が取りづらいということで言うとなおさら相反する、矛盾する要望というか課題が増えてくるということだけになってしまうんですが、そんなことも考えながら行ければいいかなと思います。特に町の財政的なことで言うと特別支援学級を非常に手厚くやっているというのが立科町、立科教育の特徴ですが、これはできるだけ活かしながらも、ただもし例えば学級減をしなければいけないとなった時は町の財政の中でいわゆる県なり国が示すガイドラインの教員定数確保できないときに町の雇用する職員を雇って先ほどの学級数を維持するのかどうなのかということもやはり考えなきゃいけないと。その時にはバランスの問題として特別支援学級のほうをどの程度充実させながらなんですが、その分もある程度バランスを考えていかないとこれからは財政的にはかなり厳しくなってくるのではないかと。特別支援のほうを軽んじろという意味ではありませんが、そんなことのバランスをその都度考えていかないと厳しくなってくるんではないかと思っています。以上です。

塩澤教育長：ありがとうございました。堀さんいかがでしょうか。

堀委員：私は県の35人学級からのことですが、やっぱりこれからは30人学級を強力に推し進めていくような感じが一番普通じゃないかなと思います。35人学級も国に先駆けてやれたんだから県はそれをまた30人学級とかできると思います。それから校舎の対応年数がもうどのくらいあるか分からないということにもあわせて考えたいんですが、立科義務教育学校みたいな形でやっていくときが来るのかなっていう思いもあります。県下では何校かありますが、そうすると中学校の教員も小学校で専科として教えるとかそういったことも可能となってくるというところもあるので、そういったもっと大きな視野で見ていくことも必要じゃないかなと思っています。以上です。

塩澤教育長：ありがとうございました。池田さんはどうでしょうか。

池田委員：私、教員でもないので詳しい専門的なことは分からないのであくまでも素人の考えとして意見を述べさせていただきたいですが、先ほど堀先生もお話された部分のことになってきますが、少々大きな夢といいますか、理想論的なことでお話をする形になると思いますが、やはり生徒数が増えていくことは本当は良いことだと思いますが、なかなか今までも増えていくということはありませんし、これからのことを考えると減っていくことは自然現象で仕方がないのかなと。ただ現実的に来年からすぐに減っていってしまう、これが単級の危機ということが私は一番危機感を持っているところです。さらに中澤先生おっしゃったこととリンクするんですが、特別支援学級の児童さんを除く形にたぶんなっちゃうと思うので、そうすると令和5年を除けば基本的には全学級単級になっちゃうのかなという恐れがまずありますよね。じゃあどうしたらいいのかということですが、もちろんこちらに来ていただける方を増やせれば一番いいのですが、今までもやっていますし、簡単なことではない。非常に予算もかかるし、大きなスケールの話になっちゃいますが、どっちにしても小学校はもう近い将来老朽化で何とかしていかなければならない問題は当然あります。ですからやはりそこの部分をどうするのかと。一番いい将来的な20年30年を見越した時にどういった形が一番いいのかを考えた上で形を作っていかなければいけないと思いますが、その時に先ほど堀先生おっしゃられたように一応佐久穂がやっている小中一貫、これは私も当たり前だと思いますし、さらにもっと言えば同じ小中一貫でも義務教育学校とちょっとまた違ってくると思いますので佐久穂の大日向小学校ですかね、あれは私立だと思います。軽井沢の風越学園も私立だと思います。ただ近いところに私立ではあるが、ちょっと変わったことをやって、一応私の中では成功しているんじゃないかと個人的には思います。成功事例のところはあります。私立と町立で同じことができるのは難しいかもしれないけども、そこに出してそういったことができれば逆に言うと東京とか首都圏からも子どもたちを立科町に引っ張ってくることができるかもしれませんよね。実際問題、大日向にしても風越にしても地元の子どもよりは首都圏からのお子さんとかが多いと思います。そういったところを前面に打ち出せれば、日本中からお子さんを立科に通わせたいということで家族ごと引っ越してくれるというところも出てくると思いますので、場合によってはそういう方法が一番早い。子どもだけを増やすんではなくて。町の人口増にもつながってくる可能性もあります。スケール大きな話なんですが夢として言えばそういう部分まで想定した上でやっていくということもありなのではないかと思います。以上です。

塩澤教育長：ありがとうございました。久保井さんお願いします。

久保井委員：私も全然素人で分からないので個人的な意見なんですが、子どもの数が減っているというのは、原因の一つに子育てに結構お金かかるんじゃないかなってみんな感じていると思うんですが、いい教育を受けさせたいなと思ったら大学までとか思うと、果てしない金額になっていくような気がして、それが1人増えるごとに何百万だか何千万だか分からないですが、そういうのを雰囲気で感じちゃうとやっぱり3人欲しいけど2人にしようかみたいなお家もたぶんあると思います。その辺を町のほうもやっていただいているのかもしれないですが、アピールして、立科だったら大学まで行かせますよみたいなのあるんだったらそういうのをすごい言えば、じゃあ住もうかなという人も増えるかもしれないなっていうのは思いました。来年から1人1台タブレットが学校に導入されるんですよね。そういうのもコロナでオンライン進んだと思いますが、英語の発音とかだったら、本当の外国と繋がれば一番よく聞こえるし、使い方によっては人数少なくてもいい勉強ができるんじゃないかなって思ったので、その辺ちょっとまだ研究できていませんが、いい方向でそういう機械を持ち腐れにならないように使えればいいかなと思います。以上です。

塩澤教育長：ありがとうございました。今、各委員さんから色々ご意見いただきました。将来的には減少の幅がどうなるかは分からないけども、このままの状態で行けば廃級になっちゃうよねというのがおおよその見方だと思います。そうなったとき学校運営をどうやっていくかということだと思います。これは堀さんや池田さんから話がありましたが、長い目で見て考えないといけないと思います。ただ今できる段階で何をやっていくか。今既にそこに児童・生徒がいるがいる訳です。その児童生徒をないがしろにしてはいけないので。それをいかにしてやっていくか。さらに将来に向かって子どもたちのためにどうやっていったら良いかという流れで検討させていただかないといけないのかなと思います。将来的なことを言えば小学校も築40年以上経過するということになってくると修理もそろそろかさんでくるよねと。子どもの数も小中合わせてどう考えるかというところでだんだん話は進んでいくんだろうなとは思いますが、今できることをとりあえずやってみてそれで少しでも今の状態を良くするというか現状維持でもいいので良くして、それで子どもたちを指導できればと思っています。あとになってもうだめだとなってから、それから考えるのはまたそれも遅すぎると思いますが、タイミングが難しいと思いますが、いずれにしてもこの先子どもが減るのは間違いないという中では、さっき言ったように小中一貫もあるだろうし、義務教育学校というのもあるだろうし、1校でやるのか、それぞれ分かれてやるのか。それぞれの特徴やいい面悪い面も出てきますのでこれはまた追々、委員さん方にもその機会の折には是非ご意見をいただきながら進めていければいいなと思っていますが、ただこれ出してすぐできる事業じゃありませんので、当然やるとなれば金もかかるので、それにはお家の方による参画をいただく中でそういった機会を設ける必要があると思います。まずは教育委員さんに実態をご承知おきいただいて将来的なものをこれから考えていく必要があると思いますので色々な場面でお気づきの点ありましたらご提言をいただければ大変ありがたいです。今日、総務課長も来ていますので財政を担ってもらっていますので、町も何かあった時はやっぱり金がなきゃということで、この会議には財政担当が出ることになっていますが、何かやるにはもちろん金がかかるので、さっきの先生方をお願いするということだけでも金が当然かかってきますので、今をやりながらさらに先のことをとなると、それなりの財政運営を考えながらやっていかないと事は進まないのかなと思っています。

中澤委員：1点よろしいですか。その財政的なことで言うと、教員レベルじゃなくって先ほどもタブレットの話ありましたね。タブレットの指導できる人は教員免許持ってなくてもいいと思います。そういう人は例えば小学校担当、中学校のタブレット指導担当者を町のほうで雇っていただく感じで、タブレットが有効活用できるような人材を教員免許と関係なく町のほうで少し検討していただくというのは一つ大きなことだと思います。もう一つは先ほどのタブレットのところで言うと複式学級というのは何でも少人数で30人で全部やればいいという話でなくて大人数でなければできない授業がありますよね。例えば体育とか実技系統とか合唱とか音楽というのはある程度数いないと協力してできないと。個別学習、タブレットを使って個別学習できるものは学年取っ払っても、3・4年生でも一緒にできる授業はないのだろうかということも含めて、固定的に考えないでもしタブレットが入ったことが、かなり授業形態とか環境が変わりますので必ずしも複式学級や少人数でない、35人の学級1つでやらなきゃいけない、大変だっていう思いが先生方にもあると思いますが、逆にそれをうまく現状に対応するための授業形態ということでタブレットのことも考えて、タブレットについて言えばですね。先ほど言ったようなタブレットの教育なんかを、使える人材を学年担当じゃなくて学校全体で見れるような人というのがいるとそれこそ学校現場にはとても良い応援になるんじゃないかなと思います。

塩澤教育長：一応今年度の予算の中に学校でのタブレットの指導してもらう専門家をお願いする費用を一応計上させてもらっています。できるだけ、やっぱりせっかく大金かけて入れるものなのでただ学校の持ち腐れだと困りますが、宝の持ち腐れにならないように是非指導できるように。まだこの方と確定はしていませんが見ていただくための費用を計上させてもらって是非私ども、学校には活用してもらいたいと思っていますのでできるだけ指導していきたいと思っています。また学校の中にもICTに長けた先生がいますので、その先生もそれこそ自分の教科だけじゃなくて学校全体の中で使いまわしをあわせてしてもらえればと思いますし、それから蓼科高校に1人町費の中澤先生。あの先生が結構ICTに長けていて、高校の中でよく指導してくれるので校長にもお願いして、また学校と打ち合わせしながら空いている時間をこっちにも手を貸してというお願いをしてあります。せっかくの宝物ですのでそれを有効に活用できるように努力、十分考慮しながらやっていきたいと思います。他、全体通して委員さんからご意見ご質問等ありましたらお願いします。

池田委員：本当に来年の1年生からは現実的に単級になるということですか。小学校1年生32人ですよね。来年というか令和4年は。

中澤委員：再来年

塩澤教育長：そうですね。令年4年ですね。再来年の1年生からなる可能性が高い。

市川次長：4人転入があればクリアできる。

塩澤教育長：正直な話、期待しているのは、今実家を離れて他市町村に行っているのも、小学校に行くようになったということになるとこれからずっと友達と一緒にいなきゃいけないから途中で帰ってくるのも大変だからやっぱり地元に行くかという方が何名かあります。そこに期待しているんですけどね。ただそんなのは数えるほどしかないので。先ほど中澤先生言ったように一人の重みがものすごく大きいですよね。だから少しでも一人を大事にして、来てほしいなと思っています。

堀委員：原紙のところ、令和4年度に32人だとしたら、16人・16人で町で1人入れていただくということは可能ですか？

塩澤教育長：可能なんですが、そうなるとそこでやると、その次の時、5年度は良いけど6年度が30人です。6年度の時には30人しか入学しません。そうするとそこの2クラスで一度それやるとずっとそうやっていかないと、あの時のクラスはやってくれたけど、このクラスやらないっていう訳にはいきませんので、一度やるとずっとやっていくことになりますのでそこは慎重にやらざるを得ないとは思います。

中澤委員：ちょっとやりきれなくなってきちゃう。

塩澤教育長：難しさあるんですよ。ただ、教育委員会とすれば、今まで20人から25人くらいのところで1クラスになってたのを32人にするとすれば大変だと。やっぱり2クラスにしたいよねとは思いますが、ただ今度は財政的なことも考えないとずっとの話になるので1年だけやって終わりだよという訳にいかない。1年やればそれを6年間やるということですね。もう1学年そういうところが出ればそれを続いて6年間やることになってきますので、財政も絡んできますので慎重にならざるを得ない。だけど気持ちとすれば何とかやってあげたいというのが教育委員会です。できればそうならないためにも子どもさん増えればいいなと願うばかりです。

中澤委員：一番保護者の心情とすれば入学の時には2学級でいったけど子どもが減っちゃって1になるのは非常に困るという。だけど最初の1年の入学の時から1学級であれば定数があるのでしょうがないかなとはあると思います。今この数で32でそのままもし行ってしまえば1学級で行かざるを得ないという状況は…。

池田委員：知障・情障入ったらまた更に減るってことでしょ？

塩澤教育長：そうです。

市川次長：その数は入れませんのでさらに厳しくなります。1学級になると保育園から中学校卒業するまでずっと同じメンバーで。

塩澤教育長：保育園でできた人間関係がずっとっていう大変な面もあります。いい方向へ作用している時はいいですが、逆の面になった時は人間関係の修復が大変かなということがあります。学級数の問題だけじゃなくて各方面にそういった数によって影響が出てくるところがあります。いずれにしても減るものはしょうがないですが、当面はできるだけ2学級維持できるような策を町も考えて、県にも要請できるものは要請していくという風にしていきたいです。正規の教員さんでなくても講師でも同じ教員免許持っていますのでただ正規かどうかの違いですのでそういった方にも配置をしてもらって支援してもらうようなこともやはり考えていかなきゃ、町が全部見るのはなかなか大変だと思いますので、できれば細長くやっていきたいと思っていますが、いずれにしても最終的には委員さん方お考えのように小中の在り方も含めた中で検討を進めざるを得ないのではないかと思います。それもそんなに遠くはないと思います。現実的に大変だというのは住民の方、保護者含めて当然理解してくれるようになったと思いますので、そうなってきたらそういう方向も考えてもいいのかなと思いますが、今の段階ではまだそこまでという、無理があるのかなと思っていますのでいずれにしても保護者の皆さんにもできるだけ大勢子どもさん通ってもらえるような町になるように頑張っていくので協力してくれと言ってもなかなかいい表現がないかもしれませんが、お子さんが増えるように、そんなことがとにかく増えてくればと思いますが。

中澤委員：先ほど教育委員会の最後のほうで教育長からお話ありましたが、スクールサポーターとか学習支援員のお話がありましたよね。仮に例えばこういう法定数で行って1学級でやらざるを得ない条件が生まれた時に、特に学習支援員についてはできるだけ例えば数学については2学級でやるとか、あるいはティームティーチングでやるにしても個別指導を熟知するという形でのことというのは県である程度見てくれるところはあると思うんですが、学習支援員等々のいわゆる教員免許を持った方の学習支援員の応援というかサポートも今からクラスがもし1で行かなければいけなくなった時に補助的なことで十分ではないですが、補足的なことですが、考えていかなきゃいけなくなるかなと思います。

塩澤教育長：そうですね。今はもう小学校には町の予算で数学というか算数も少人数対応の先生を採るお願いはしてはいるんですが、でも当然これから先のことを考えると英語とか、グローバルになってきますのでうちの子たち遅れていっちゃうという訳にいかないのでそういうことも視野に入れながらやっていく必要があると思います。

市川次長：さっきの国の35人学級、2年生からのを来年春から進めていくという話ですが確か今の文科大臣ははじめ30人学級が必要だと言ったと思います。そうなるのかなと思ったら、当初予算はとりあえず35人からと。当然教員の数もそれなりに確保しなきゃいけないので。このままどんどん減ってきても、学級数が規模小さくなってくればそれだけ教員の数も増やさないといけないので天秤にかければ教員の数を増やすほうがやっぱり子どもの数が減るよりは教員の数が増える方が大きいということで、財政的な負担もいっぱいあるということでとりあえず35人で向かって、今の大臣は34人学級が必要だって言ってて。そういう認識はあるということなので頑張っていただいければ。ありがたいかなと思います。

塩澤教育長：余談ですが、今年の先生方の人事、小学校の先生が不足したんです。

中澤委員：欠員が出るってことですか？

塩澤教育長：ええ、かなり。それは来年度35人学級になるということで教員の数が足りなくなるということで、今年の教員人事の中に小学校は先生の数が足りなくなって講師起用を決行です。

中澤委員：なるほど。欠員補助の為に講師を雇うということですね。立科だけじゃなくて全県の話ですか？

塩澤教育長：全県の話です。それこそあっちもだめ、こっちもだめということでかなり大変だったみたいです。うちのほうはなから配置はしてもらいましたが、そんなような状況でした。また来年も当然こういう教員採用が増えればいいですが、増えなければその分講師対応になっちゃうかなと思います。毎年それが6年生まで繰り返されていきますので、そういう時があるのかなと思っていますが。

池田委員：臼田みたいに今4つあるところが統合するという手ができればまだいいんだけど立科はね。

塩澤教育長：もう統合しちゃってるからね。それがあれば最初から先見の明はあったと思うんですけど。保育園もそうですが統合しちゃって1個にしちゃって。その限界を過ぎるとなった時にどうするかという難しさ。そうなると今度小学校と中学校かというように。

池田委員：学校運営という点で考えると小中一貫である意味解決できるかもしれないけども、さっき次長が言ったような単級という部分は小中一貫だとしてもなかなか解決できないですよね。子どもが増えない限り。それを実現するとすればできるかできないかは別として言いますが、例えば長和と合併するとかだよね。学校を、町を超えて。そういうようなことはできるかできないかは別だけど中学の依田窪もそんな感じでしょ。だからそういう感じで合併すれば単級と単級なら2クラスにはなりますよね。色々な問題はもちろんありますけど、単純にそういうことも方法としては。まあ難しいけど。

塩澤教育長：学校や子どもたちだけの問題だけじゃなくて行政と行政の問題出てくると。例えばそうなった時に今の依田窪もそうですけど組合立ですね。学校だけに関して共同でやろうという話ですね。そうならざるを得ない。やるとすればですよ。それぞれの町や村がみんな一緒にやるとなるには相当ハードルが高いと思いますので。向こうもこのことに関しては困っていてうちも困っているので一緒に改築しようと、そういう一部的なのは想定されなくもないんだけども、それぞれの自治体がということになるとちょっとハードルが高いかなと思います。

中澤委員：信濃町の小中一貫校なんかも情報は入っていますか？

市川次長：特別にはないですが。

中澤委員：公立で小中一貫校にして

塩澤教育長：あそこは今言ったように合併したのでそれにあわせて小中一貫校にしたということで、だから昔みたいに小さいところだけだとなかなかうまくいかないので合併しようと。

中澤委員：先ほどの学級数のことを合併しても、小中一貫になっても変わらないじゃないかという話もあるけど、人的な面で言うと教員が小中一緒になると確かに色々できるんですよね。中学の教員が

池田委員：替えられるんでしょ？

塩澤教育長：そうです

中澤委員：それでかつ、問題は日課ですよね。授業が小中一緒の時間割でやらなきゃいけないから50分授業するとすれば小学生耐えられるのって話になります。40分にすると中学生はそれでいいのかって話になる。それが一番大きなネックになるんじゃないかと思うけど、やっているところはありますので、そこの研究、信濃町はどうなったのかなって。7、8年になりますかね。どんな風になっているか知りたいなと思います。

堀委員：私、女性教育委員会で、信濃町の小中学校、義務教育学校に行ったことがあるんです。そしたら、あそこはチャイムはなくて、5・6年生が50分間授業をやってたと思います。それで中学校の先生が教えに来るとか、そんな風な形を取っている。とにかく4校と1校の中学校が一緒になってるんですね、あそこは。

堀委員：義務教育学校って言うんです。

池田委員：佐久穂は小中一貫でしょ？

市川次長：佐久穂はそうです。

中澤委員：義務教育学校だったら、6・3制じゃなくて5・4でもいいですね。

堀委員：そうです。平成29年度だったんですが、4年生までの4年間…初等部と高等部に分かれて、初等部が1年生から4年生まで。とにかく9編成、最後は9年生という形で。

中澤委員：特に小中ギャップというか、6年生から中学校に上がるときの色々な人間関係とかの問題ね。単級だったら交わらんで良いかということもあるんだけど、学びのレベルというか段階から言うと、4年生の段階と5・6年が全然違うということからすると、やはり小中も一緒になるって結構メリットあるんじゃないかなと思います。

堀委員：義務教育学校信濃町町立信濃小中学校っていう名前だった。

市川次長：義務教育学校も小中一貫校も両方とも例えば今の6・3じゃなくて、5・4制とかそれはどっちでも可能らしいです。義務教育学校になると校長1人だし、小中一貫校はそれぞれ小学校は小学校、中学校は中学校

池田委員：どっちがいいものなんですか。一長一短かもしれないけど。

市川次長：既存の建物使うとすれば小中一貫校のほうが。やっぱり子どもの数が少なくなってきて、なるべく財政負担を少なくするように一緒にした方が効率がいいよねっていう、そっちのほうから話が始まってだんだんあちこちに増えていくのかなって。

塩澤教育長：ある中でいかに子どもたちの為にできるかということを考えざるを得ないと思います。ありがとうございました。そんなことで生徒数が減ってくるということで学校運営もなかなか厳しさを増してくるということで、将来的には色々な方策を考えざるを得なくなるのかなと思います。事あるごとに委員さんのほうからご意見ご提言等ありましたらお寄せいただければありがたいのでよろしくお願いします。その他何かありますか。

市川次長：特別資料は用意していないんですが、せっかくの機会ですので来年度の予算で、新規の主だったものだけ口頭で。小学校の低学年棟、1・2年生のトイレなんですが、今男女兼用で1・2年生使っていますが、これを今の時代なので男女別々にしたいという要望もございまして、1・2年生低学年用トイレを改修する予定です。男女それぞれ別にするということで。これが1,800万円ほどの工事費で、これが来年度一番大きな工事になるかなと思います。それから先ほど教育長言いましたように来年度中学校にスクールサポートスタッフを配置ということで、今年度県費で小中のほう配置があったんですが、来年度小学校はあるんですが中学校はないということで町単独でスクールサポートスタッフ配置をさせていただきます。工事の関係では中学校、今の立金との境のところに古くなった塀が、コンクリート塀があるんですが、あれも少し危険かなということになって、あれを取り払ってフェンス的なものにしていきたいという風に思っています。中学校の職員の駐車場、外灯がなくてだいぶ暗くて危険な感じもするということで、そちらに新しく外灯をつけたり、また外灯のLED化も進めていきたいということで227万ほど工事費を盛ってございます。それから権現山の風の子広場のトイレ、女子トイレなんですが、今洋式便所が入っていなくて今の時代洋式も必要だということで一つ洋式便所を増設するということです。130万程工事費をいただいて、洋式のトイレを一つ増やしていきたいということです。それから先ほども言ったようにICTの支援業務に携わる委託が若干ございます。先ほど教育長から話がありました中島先生ですが、教育相談員という立場なんですが、出勤日を増やしていただいて指導主事のほうも兼ねてやっていただくと。学校教育に寄与していきたいということでございます。当初予算の関係以上になります。これとは別に昨日からコロナ対策の関係で今回第3次分の地方創生の臨時交付金が来ております。これが2月に入ってやっと金額が出てきて、第3次で1億１千万くらいかな。第3次で立科町の額は。これの使い方考えていますが、今からでは今年度事業はできないということで来年度令和3年度の事業ということで立科町でコロナ対策を考えていくことになると思いますが、一応教育委員会からはこのコロナ対策の交付金を利用して要望を上げているのは小中学校ともに密の回避というか換気を良くするということの中で、網戸、今小中網戸が構造上網戸が付けられない構造になっていまして、どこにも網戸がほとんどついてないです。例えば教室に行けば2か所網戸をつけて途中で窓を開けて換気するようなことをしていきたいと。何で網戸をつけるかと言うと、冬場はいいですが、虫が入ってくると特に小学生はそれに気を取られちゃって授業にならないということもあって、その対策もあって網戸をできればつけたいということで、このコロナの交付金を利用して付けられればいいなと要望をしていきたいと思います。あと小学校で放送設備が具合悪くて今、全校生徒、児童が一同に体育館に集まって集会をやるのはなかなか難しいので、各部屋にいながらテレビで生放送見ながら集会ができるような設備に変えていきたいということで。この放送設備が375万ほど、それから小学校の網戸が450万円ほど、中学校の網戸が230万ほどなんですが一応この工事費について要望して参りたいと。ただこれは町全体のコロナ対策で使う予算なので町の優先順位がどんな順位になるかによってもどうなるか分からないですけど、今の段階での要望としてはこんなことを考えています。来年度に向けては以上です。

塩澤教育長：はい。他、事務局のほういいですか？今、次長から挙がった予算的な問題につきましてはあくまでも予算が成立すればというのが前提になっていますので、確定ではないのはご承知ください。できるだけ議員さんにご理解いただければと思います。またコロナ対策の要望についてありましたが、町ではもっと経済的に大変疲弊している業種もありますのでそういったところの支援もやっていかなきゃいけないということで、町全体の中のバランスを考えながら教育委員会のできるものは対応してもらおうと思いますが、今のところの要望としては今挙げた通りでご承知ください。よろしくお願いいたします。それではいいですね、ありがとうございました。委員さんのほうは全体を通じて何かありますか？よろしいでしょうか。ありがとうございました。それでは協議事項のほうは以上を持って終了させていただきます。

市川次長：前段の定例教委から始まって長時間ご協議いただいて大変ありがとうございました。今後の学校運営についてということで、またそれぞれ委員さん方それぞれのお立場でご指導ご意見等いただければありがたいです。今後ともよろしくお願いいたします。それでは以上を持ちまして令和2年度の立科町総合教育会議を以上で閉じさせていただきます。大変ご苦労様でございました。

塩澤教育長：今日は長い間ありがとうございました。